万葉論
3章　第三巻

九州天皇家と近畿天皇家

雷山と水城と太宰府

万葉集第三巻はそれまでの第一巻、第二巻と編纂理念を異にする。九州天皇家鎮魂という目的は失われ、従って、九州天皇家の代から近畿天皇家の代までの歌によって歴史を構成するという編集形式は採られていない。ただ、歌を集めただけの歌集である。

だが、そうは云っても、むろん、九州天皇家の代の歌が収録されている。その代表が第三巻第一首、人麿の雷岳の歌である。さて、この「雷岳」とはどの山か。通常、奈良明日香雷にある小さな低い丘と考えられている。

写真の如く、奈良のこの丘をご覧になれば、人麿が歌った雄大なイメージの山がまさかこの丘かと、落胆されるであろう。

いかなる詩人も奈良明日香雷の低い丘に立って、「天雲の雷の上」と、歌うことはないであろう。すでに、多くの指摘がある通りである。人麿の歌はこの丘の歌ではない。

雷岳の歌

天皇、雷岳に御遊しし時、柿本人麿の作る歌一首　235
大君は　神にし座せば　天雲の　雷の上に　廬らせるかも

大君は神でいらっしゃるから大空の雷のその上にいほりしておいでになることである。
雷岳を実際の雷のように見なして歌っている。（日本古典文学大系・萬葉集一頭注235）

右或る本に曰はく、忍壁皇子に献るといへり。その歌に曰はく、
王は　神にし座せば　雲隠る　雷山に　宮敷きいます

題詞の天皇とは持統天皇である。人麿が持統天皇と共に「雷岳」に登った時の歌である。人麿歌の原文では「大君」ではなく「皇」と書かれている。

皇者 神二四座者 天雲之 雷之上尓 廬為流鴨

原文の「皇」は「大君」と訓まれている。「大君」と訓めば、それは持統ということにもなろう。故に、人麿は持統を「神にし座せば」と讃えて歌ったという解釈となる。しかし、原文における「神にし座せば」の主語は「皇」である。原文のままに、主語を「皇」とすると、「皇は神だから天雲がかかる雷の上に廬しておいでになる」という歌となる。「皇」とは持統天皇ではない。人麿が持統天皇を歌ったのであれば、「大君」「大王」と歌ったであろう。

では、「皇」が持統でないとすれば、「皇」とはいかなる存在なのか。作歌状況を考えてみよう。人麿の歌は持統天皇が雷岳に登った時の歌である。その時、人麿は雷岳の頂に立っていた。当然、持統天皇もそこにいた。
だが、山頂にいたのは、持統と人麿の二人だけではなかった。そこにはもう一人主役がいたのである。その人物が「皇」である。むろん、「皇」はこの世の人ではない。「神」である。「神」として雷岳に祀られていた人物である。
山頂に祀られていた「皇」を、「皇は神だから天雲のかかる雷岳に祀られておいでになる」と人麿は詠ったのである。「皇」とは神となり、神として祀られた古代の王である。

雷岳の山頂には古代の王が祀られていた。持統も人麿もその王が天雲の雷岳に祀られていることを知っていた。そして現地に立った。「皇」は天雲のかかる雷岳に祀られている。

皇は　神にし座せば　天雲の　雷の上に　廬らせるかも

雷岳とは前原市雷山

ごくごく、自然な歌である。では、この「雷岳」とはどの山か。山頂に古代の王が祀られている。山頂は天雲の上にあるかのようにそびえている。このような「雷岳」とはどこに存在するか。むろん、奈良明日香雷の丘ではない。まさに人麿の歌にぴったりの山が存在する。すでに古田武彦氏が詳しく論述されているところである。（「古代史の十字路・第八章雷山の絶唱」　古田武彦著）

その山とは、福岡県前原市の雷山（らいざん）である。雷山は標高954m。山頂には雷神宮の上社がある。ここには古来、神が祀られてきた。

山頂は福岡県側に位置する。頂上の下に広がる草原を「層々岐野（そそぎの）」と呼び、神功皇后の伝説が伝えられている場所という。この野原の名に因んで「雷山」は「層々岐岳（そそぎだけ）」の別名を持つ。頂上には雷神社の上宮（石祠、三つ）がある。古来、山全体が雷神の鎮座する霊山と考えられ、故に「雷山」の名を持つという。地元では「雷山に雲がかかると雨になる」という。
雷山千如寺大悲王院（雷山観音）、神籠石、不動滝（清賀の滝）が観光名所。
（http://ja.wikipedia.org/wiki/）

人麿の作歌場所は、雷山の山頂である。山頂からの景色はすばらしい。この場所に立てば、眼下に前原市を一望する。また、玄界灘を遠望する。軍事的に見れば、この山は玄界灘を渡ってくる船団を真っ先に発見することができる要所である。むろん、持統天皇は観光のためにこの山に登ったのではない。「皇」への参拝のた

め登山したのである。古代の王「皇」は、自分を雷山の山頂に祀れ。自分は其処にいて敵の侵入から國を護っていよう。このように遺言したかのように思える。雷山の山頂に祀られた古代の王の三つの祠はまるで山頂から外敵の侵入を今なお見張っているかのように、玄界灘を見下ろしている。

人麿が歌った「雷岳」とは北九州の雷山である。「山頂に祀られた神」「雷神が鎮座する霊山」「雷神宮上社」「中社」「下社」等々、いかなる視点からも、この山こそ、人麿の歌にふさわしい。持統天皇と人麿が登った「雷岳」は、地元の人々から、雷山に雲がかかると雨になると云う、雨雲の上にそびえる九州雷山である。

雷山頂には上社があり、祠が三つある。中腹には雷神社中社がある。では、雷山の山頂に祭られた「皇」とは一体何者なのか。また持統、人麿は何故この「皇」を参拝したのか。
幸い、「皇」を歌った人麿の歌がもう一つある。この歌を手がかりに、「皇」を考えていこう。

海成可聞（海を成すかも）の情景

「皇」を歌ったもう一つの人麿歌は次の歌である。

或る本の反歌一首　241
皇は神にし坐せば眞木の立つ荒山中に海を成すかも
（皇者 神尓之坐者 真木乃立 荒山中尓 海成可聞）

この訓みでは、「皇」は原文通り、「皇」と訓まれている。「皇」とは持統ではない。従って、先ほどの235歌の「皇」も、原文通りに「皇」と訓まれるべきである。この歌も古来難解とされてきた。下の句の、「荒山中に海を成すかも」の意味が通じないからである。荒々しい山の中に海を作ったとはおよそ想像することができない。

故に、「海鳴りすかも」と古田武彦氏は訓む。「海成」を「海鳴」と読み替えるのである。なるほど、「海を作る」と訓むより、「海鳴りす」と訓むほうがまだ分かりやすい。しかし、「成」と「鳴」とは意味が異なる。万葉集歌の原文で「鳴」を使った歌は294首ある。その用法は「鳥が鳴く」「コオロギが鳴く」「鶏が鳴く」「セミが鳴く」「蛙が鳴く」と

いうものである。「鳴く」という意味では「鳴」という漢字が使われており、「鳴く」という意味で「成」という漢字を使用する用法はない。また、「成」を原文で使った歌は184首で、いずれもその意味は「成る」「成す」「成り」である。この場合も、「成」という漢字が「鳴る」という意味となる用法はない。「成」と「鳴」とは厳密に区別されている。

万葉集の語法では「海成」を「海鳴り」と訓みかえることはできない。古田氏の訓みは成立しないであろう。従って、原文「海成可聞」は、「海を成すかも」と訓まざるをえない。「皇」は海を作ったのである。

万葉第三巻の編者は、この歌を天武の第四皇子長皇子が猟路の池に遊んだ時の歌の次に編纂している。

長皇子猟路の池に遊しし時、柿本朝臣人麻呂の作る歌一首

239　やすみしし わが大王 高照らす わが日の皇子の 馬並めて み狩り立たせる 弱薦を 猟路の小野に 猪鹿こそば い匍ひ拝め 鶉こそ い匍ひ廻れ 猪鹿じもの い匍ひ拝み 鶉なす い匍ひ廻り 畏みと 仕へまつりて ひさかたの 天見るごとく 眞澄鏡 仰ぎて見れど 春草の いやめづらしき わが大王かも

八方を治められるわが大王、輝く日の皇子、長皇子が馬を並べて狩りに出かけておられる。狩路の小野では猪鹿がうずくまり、鶉もうずくまってめぐっている。そのように仕え、天を見る如く仰いで見る長皇子は春草のように愛らしい皇子である。

240　ひさかたの天行く月を網に刺し我が大王は蓋にせり

天の行く月を網に刺して長皇子は蓋（うしろからさしかける傘）にされていることよ。

或る本の反歌一首

241　皇は神にし坐せば真木の立つ荒山中に海を成すかも

239番歌の反歌は240番歌である。問題は無い。だが、241番「皇」の歌は、239番歌の反歌ではない。「皇」の歌には、いかなる本か不明ではあるが、「或る本の反歌」と注釈があるように、長皇子とは無関係である。明らかな編集ミスである。万葉第三巻の編纂者は九州天皇家出身の歌人ではないと思われる。

日本古典文学大系の頭注は「皇」を長皇子と解釈している。「皇」を「皇子」と読み、故に長皇子と解釈している。

頭注241
わが皇子は神でいらっしゃるから、真木の立っている荒れた山の中にも海をお作りになることである。猟路の池を海に見立てている。

この註もまちがっている。「皇」とは持統天皇でもなく、また、長皇子でもない。「皇」は雷山の頂に祀られている古代の王である。この時、持統も長皇子も、まだ、この世の人で、神として祀られていたわけではない。

239番歌と240番歌は「猟路の池」が作歌場所である。ところが、241番歌の作歌場所は「猟路の池」ではない。頭注は三つの歌を一連の作と捉えて、「猟路の池を海に見立てている」と、注釈しているが、この注釈も当たらない。長皇子が馬に乗って出かけた「猟路」は小野である。「猟路の池」は平野の池である。一方、「皇」の海は平野ではない。荒々しい山の中の「海」である。

241　皇は神にし坐せば真木の立つ荒山中に海を成すかも

皇は神でいらっしゃるので槙の木がそそり立つ荒々しい山の中に海を作られたことである。

この歌は、持統が雷山に登った同じ時に人麿が詠った歌である。人麿は、「皇は天雲のかかる雷山の上に庵している」と詠み、また、「皇は海を作った」と詠んだのである。「山」と「海」はいわば対をなす歌である。人麿は山を歌い、そして海を歌ったのである。

この歌は実景を詠んだものである。人麿は人間の手が入らない荒々しい山中に、海が作られているのを見た。だが、この海は、日本海とか瀬戸内海といった海ではないことは明らかである。海は池の喩えだといえば、確かにそうである。だが、海と喩えれた池とは、「猟路の池」ではない。人麿が見た池は、自然の池ではなく、人の手によって造られた人工の池、「皇」によって造られた人造湖である。では、人麿は、どこに造られた人造湖を見たのか。雷山である。

荒山中の海とは水城

雷山には有名な史跡が存在する。「雷山神籠石」である。石垣の一部が残っているだけの神籠石は、長く謎であったが、近代の研究では、これは山城であることが判明した。しかし、ただの山城ではなく、水による防衛システムを備えていた。ちょうど、太宰府が水城で護られていたと同じ防衛思想である。

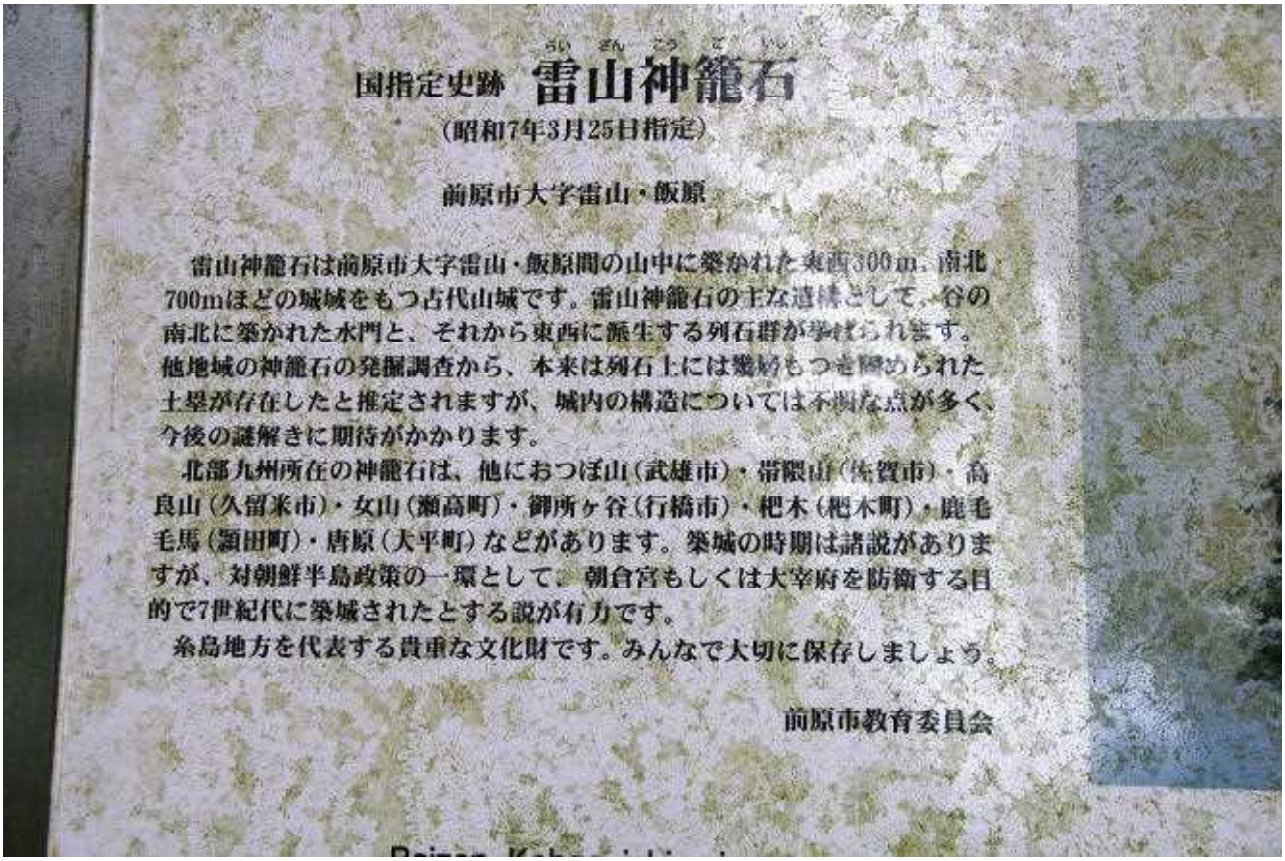
雷山神籠石山城にも巨大なダムがあった。敵が登ってきた時、水門を開いて激流を流すのである。いわば、水の城というものである。その水門が現在も山の中に残っている。水門は南北に二つあった。この二つの水門によって水は貯えられていた。

雷山の貯水池はどのような規模だったのか。雷山城域は東西は300m、南北は700mだったといわれる。かなりの規模である。この雷山の水城は、現在「不動池」としてその姿を留めている。実際に、この貯水池をみれば、この山の中に、これほどのダムがよく造られたと感動する。現代においてそうであるのだから、いわんや機器のない時代に、人力によって山の中腹に石を積み上げて作られた巨大な人造湖を見れば、人麿が「海を成すかも」と感動したのも無理はなかろう。

これはまさに山中に現れた海である。山の上に作られた巨大な貯水池は、海というにふさわしい。人麿の時代、「皇」によって築かれた水城は、まだ、雷山に生きて、満々と水を蓄えていた。人麿は、「皇」がこの山の中に造った巨大なダムを見た。感動は歌となった。

241　皇は神にし坐せば真木の立つ荒山中に海を成すかも

雷山神籠石の遠景（中央のため池の上流と下流に水門が残る）
http://www.ss.iij4u.or.jp/~hsumi/docs/iseki/kougoisi.htm



国指定史跡　雷山神籠石

（昭和7年3月25日指定）

前原市大字雷山・飯原

雷山神籠石は前原市大字雷山・飯原間の山中に築かれた東西300m、南北700mほどの城域をもつ古代山城です。雷山神籠石の主な遺構として、谷の南北に築かれた水門と、それから東西に派生する列石群が挙げられます。他地域の神籠石の発掘調査から、本来は列石上には幾層もつき固められた土塁が存在したと推定されますが、城内の構造については不明な点が多く、今後の謎解きに期待がかかります。

北部九州所在の神籠石は、他におつぼ山（武雄市）・帯隈山（佐賀市）・高良山（久留米市）・女山（瀬高町）・御所ヶ谷（行橋市）・杷木（杷木町）・鹿毛馬（頴田町）・唐原（大平町）などがあります。築城の時期は諸説がありますが、対朝鮮半島政策の一環として、朝倉宮もしくは大宰府を防衛する目的で7世紀代に築城されたとする説が有力です。

糸島地方を代表する貴重な文化財です。みんなで大切に保存しましょう。

前原市教育委員会

雷山の神、「皇」

持統天皇も人麿も、この北九州の雷山に登った。だが、人麿の歌が奈良明日香の雷の丘だったと解釈されてきたのには、それなりの理由がある。通常、持統天皇はずっと奈良に居た考えられている。奈良にいる持統が奈良の明日香の「雷の丘」に行くことはあっても、はるばる、前原市の雷山には行くことはない。雷山はあまりにも遠く、その山に登ったとは想像しにくいからである。また、奈良の持統天皇が、わざわざ、前原市の雷山に登るという目的、理由を思い浮かべることができない。故に、人麿の歌は、明日香の雷で詠われたと解釈されてきた。やむを得ない解釈であったと云うべきであろう。しかし、史実は異なっている。

(1) 人麿は天皇と共に「雷岳」に登った。この天皇とは持統天皇である。
(2) 持統天皇と人麿が登ったのは、明日香の雷の丘ではなく、前原市の雷山である。
(3) 持統天皇と人麿は奈良から前原市雷山に出かけたのではない。二人は九州に居た。

雷山の雷神社の上宮には、三つの石祠がある。持統はここまで登り、参拝した。そして、山を少しくだり、今度は、雷山神籠石山城を見た。これらは一連の参拝である。

だが、なぜ、持統と人麿は雷山の古代王の祠に参拝したのであろうか。考えれば、興味深い出来事である。この紀行は、万葉の歌だけが伝え、日本書紀持統天皇にはこの紀行に関する記事はない。

持統天皇も人麿も、ここに、「皇」が祀られていることを知っていたから、険しい山道を登ってきたのである。雷山の山頂近くに祀られている「皇」は、雷山の荒山中に海のような水城を作った王である。だが、雷山頂に祀られ雷山神籠石山城を作った王は、九州天皇家の天皇ではない。記紀には、九州天皇家の王の誰かが、雷山神籠石山城を築いたという記録はない。また、九州天皇家の天皇が雷山に祀られたという記録もない。では、何故、持統は雷山に登り、何故、人麿は雷山の王を「皇」と歌ったのであろうか。

記紀すら記録に残さなかった「皇」について、持統も人麿も知っていたのである。雷山頂に祀られている「皇」が何者か知っていたから、ここまで登ったのである。「皇」とは何者か。九州天皇家といかなる関係にあったのか。

雷山には雷山千如寺がある。

雷山千如寺（らいざんせんにょじ）は雷山の中腹にあり、西暦725年に天竺（てんじく＝インド）の僧 清賀上人（せいがしょうにん）が開創したと伝えられている古刹です。
その後、聖武天皇（701～756年）によって勅願道場（ちょくがんどうじょう）となり奈良時代や平安時代には七堂伽藍が並ぶ荘厳な寺院だったようです。
鎌倉時代には木造十一面千手千眼観音像や、清賀上人の座像が奉納され、坊舎も約300もあったといわれています。室町時代には現在の聖天堂や心字庭園が造られ、宝暦2年(1752)には福岡藩主の黒田継高公が現在の寺である大悲王院を建立しました。
雷山千如寺は安産、子育て、開運厄除 等の祈願所として知られており、また身代りの御守り（サムハラ）のお授け所として大衆の信仰を集めています。
（http://www.yado.co.jp/tiiki/itokan/sennyoji/sennyoji.htm）

http://www.city.itoshima.lg.jp/soshiki/24/hiouin.html

この千如寺に縁起があると、云われる。私は見たことはないが、内倉武久氏が著書「太宰府は日本の首都だった」の中で紹介している。

息長足姫、即位之後、改而稱神功皇后。此時韃虜竟来有侵國、劫人。水火雷電神於此瀉築水城。
於山中漂没若干、凶軍畢粤　（第5章　水城と山城）

この縁起の意味するところは次のようになる。

(1)　息長足姫は（仲哀没後）即位して神功皇后と改め称した。
(2)　この時、「韃」の賊が竟（国境）に来て、國を侵した。そして人を劫（おびやか）した。
(2)　ここにおいて、水火雷電神が水城を築き、（水を）瀉（そそ）いだ。
(3)　山の中において、「若干」を漂わせ、水没せしめた。
(4)　そして侵略者は滅びた。

水城とは軍事用ダムである。このダムが実際に使用され、敵を水没させたという史実を千如寺の縁起は伝えていた。現在の雷山不動池に貯えられている水量は相当な量である。険しい山を登ってきた「若干」が率いる韃の軍勢は山の上からものすごい水音と共に一気に襲いかかってきた大量の水に飲み込まれ、一瞬のうちに滅んでしまった。恐ろしい光景である。

実在した九州天皇家の神功皇后

神功皇后の説話は記紀に記録されている。また北九州各地には記紀には掲載されていない説話が伝わる。

豊浦宮・・・仲哀天皇の2年から8年まで住んだ宮。豊浦とは彦島老町である。彦島八幡は仲哀天皇を祀る。
田川郡香春町鏡山大神社・・・仲哀天皇と共に必勝祈願し、鏡を埋めたと伝えられる。後に、九州天皇家の「近江天皇を埋葬した「鏡山」陵とはこの陵である。
和布刈神社・・・鯛つり岩がある。毎年、朝廷に和布を献上する。
夜須・・・羽白熊鷲を撃って心が安らかになったことが地名の由来。
山門郡大和町鷹尾神社・・・土蜘蛛田油津姫を征伐するとき陣営の置かれた。
山門郡瀬高町権現塚・・・土蜘蛛田油津姫を征伐するとき自軍の兵士を埋葬した場所。
宗像郡津屋崎波折神社・・・皇后が杖をさして休んだことから、「杖さし」の地名がついたという。
糟屋郡宇美町宇美八幡宮・・・新羅から帰国後、応神をこの地で産んだので、「宇美」という地名となった。
飯塚市ショウケ越・・・生まれたばかりの応神を「ショウケに乗せて峠を越えた」ので「ショウケ」という地名となった。
飯塚市大分八幡宮・・・ここで兵を解散したので「大分（だいぶ）」という地名となった。神功の兵は九州九州天皇家の都、田川市を中心に徴兵されたものであった。故に、「大分」で解散したのである。

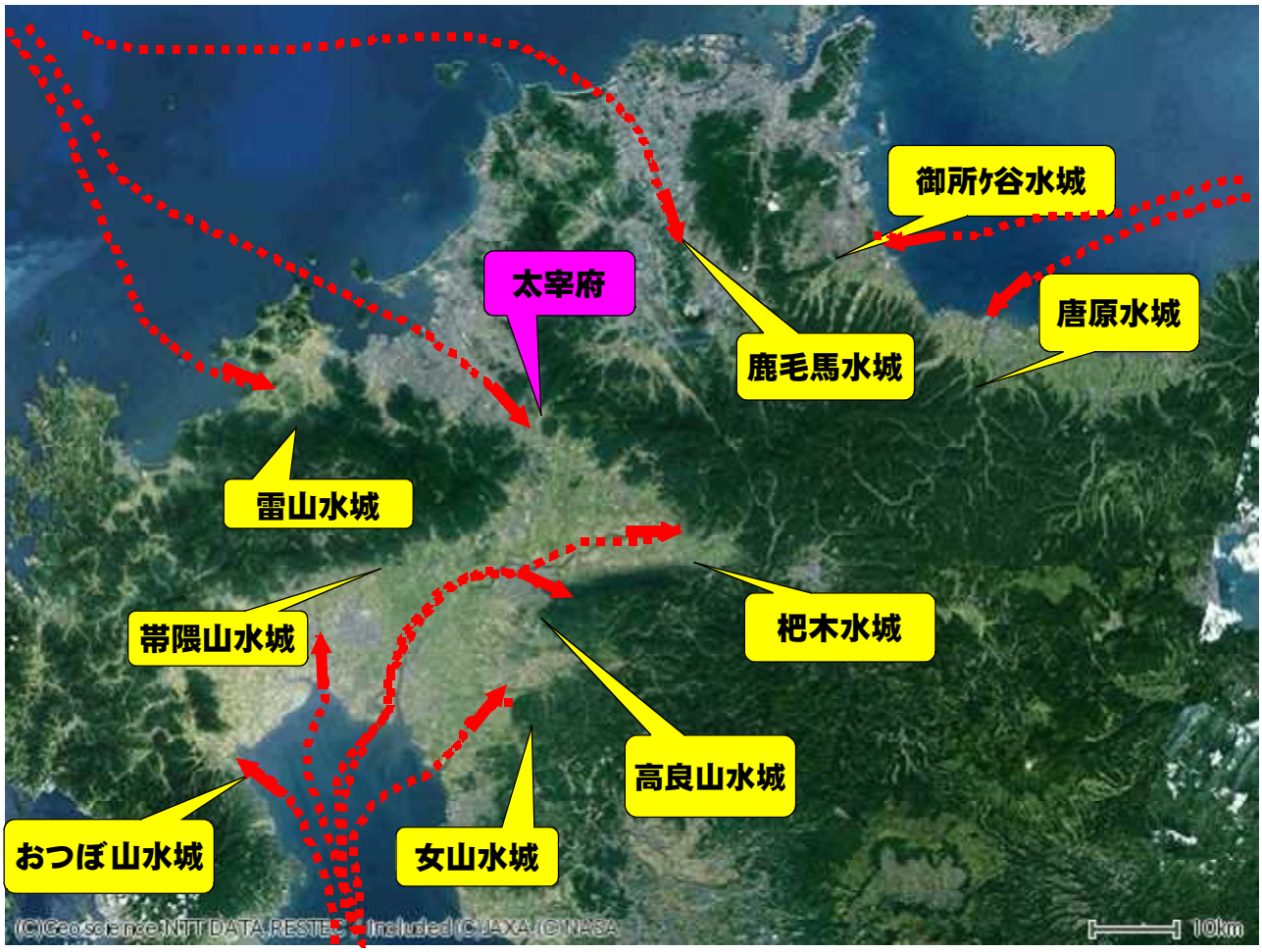
神功皇后の伝承は、北九州各地に残る。むろん、神功は実在した。仲哀天皇も神功皇后も北九州に実在した九州天皇家の王である。千如寺縁起は水火雷電神が水城を築いたのは、神功皇后の時という。神功皇后は四世紀の人である。その頃、九州は九州天皇家が支配した九州東北部を除いて、姫氏、熊氏の支配下にあった。水火雷電神とはこの一族の王であろう。

水城

現在、「神籠石」と呼ばれている石の建造物は、古代は「水城」と呼ばれていたことが千如寺縁起で分かる。従って、雷山神籠石は、「雷山水城」というべきであろう。

千如寺縁起は「韃」の國の軍勢が攻め入ってきた時、雷山に誘い込み、水門を開いて、一気に放水して、壊滅せしめたと伝える。雷山のダムに水を貯えるには長い時間が必要である。従って、雷山水城は、縁起が伝える神功皇后以前に築城されていたと考えるほうが妥当であろう。

九州には、「雷山水城」の他にも、水城が発見されている。北九州の水城の配置を見れば、水城は海外からの侵略者の進入路を防衛しているようにみえる。糸島の船越湾に対しては雷山水城、有明海からの侵入に対してはおつぼ山水城、帯隈山水城、女山水城、高良山水城、周防灘からの侵入路に対して御所ケ谷水城、唐原水城、遠賀川からの侵入に対しては鹿毛馬水城が配されている。



これらの水城は、全てが山の中というわけではない。佐賀県の「おつぼ山水城」は、どちらかといえば、平地の小高い丘に建造されている。日本の戦国時代と同じように、時代が下がるにつれて、高い山から平野部に築かれるようになったと思える。雷山水城は最も早い時代の建造であろう。水城の城下には、それぞれの古代国家が存在した。

女山水城・・・卑弥呼の邪摩惟（邪馬台国・邪馬壹國の本来の国名）
帯隈山水城・・・吉野ヶ里遺跡（姫氏の二代目の王、順の建国した委奴國）。倭人伝の伊都國
雷山水城・・・筑紫國
御所ケ谷水城・・・古代伊勢市
鹿毛馬水城・・・倭國

以上の國は記紀、あるいは魏志倭人伝に記録が残る。しかし、おつぼ山水城、、高良山水城、、唐原水城等の城下に存在した古代国家の名前は不明である。しかし、これらの水城が城下に拡がる平野を支配した国家のものであったことは疑いないであろう。ここにも古代国家が存在したのである。

水火雷電神

雷山水城を築き、「韃の虜（賊）」の王「若干」を雷山山中に滅ぼした神が、「水火雷電神」である。この神が雷山の山頂に祀られた。人麿が「皇」と歌った神である。

235　皇は神にし座せば天雲の雷の上に廬らせるかも
241　皇は神にし坐せば真木の立つ荒山中に海を成すかも

持統天皇も人麿も千如寺縁起が伝える史実を知っていた。水城は軍事用ダムであった。このダムが「韃の虜」との実戦において実際に使用され、凶敵を一気に壊滅させた。この衝撃的な勝利の報せは、すぐに他の同盟国に伝わったであろう。他の古代国家も海を渡って来る外敵の侵入を恐れていたからである。だが、水城はその恐怖を払拭してくれた。海に面し外敵と戦わなければならないそれぞれの古代国家は、水城による国家防衛システムを構築した。雷山水城の勝利が他の古代国家においても水城を建造させる動機となった。山中に巨

大な石を運び上げ、水城を建造することは非常な労力である。だが、敢えて水城を建造したのは、中国大陸からの恐るべき外敵の侵入という現実と恐怖が、彼らを突き動かしたからである。

水城を建造したのは古代九州を支配していた姫氏、熊氏である。水火雷電神とは姫氏の王であろう。では、何故、この王を人麿は「皇」と歌ったのであろうか。人麿は神功皇后の時代に、九州を支配していた姫氏、熊氏を知っていたのである。

記紀は、九州天皇家の始原の神が「高天原」に現れたことを記録している。その神の名は、「天之御中主神」である。「天（あま）」とは人名である。この神は、「天（あま）」と名乗った。しかし、正しくは、「阿米（アマイ）」と名乗ったのである。
「阿米（アマイ）」とは、松野連姫氏系図に登場する姫氏の第九代の王である。この王が九州天皇家の始原の王である。彼が造った國（弥生集落）は、その名前をとって、「高天原」と呼ばれた。「高地の阿米の原（弥生集落）」が「高天原」の原義である。この「高天原」が存在した場所は下関市彦島老の山公園である。

雷山に水城を築いた神（皇）とは、九州天皇家の祖「阿米」一族の王であったと思われる。故に、人麿はこの王（神）を「皇」と歌った。持統天皇は、他国（日本國）から九州天皇家の天武の元に嫁いできた人である。九州天皇家の遙かなる祖先が祀られている雷山に、興味を持ち、そこまで遙々参拝に登ったとしても不思議ではない。

始原の神、「阿米（あまい）」は、神武の頃まではよく知られていた。神武天皇の皇后となったのは行橋市の犀川に住んでいた伊須気余理比賣である。彼女は歌で、「阿米都都」と、神武の将に呼びかけている。意味は「阿米の男よ」である。神武一行が、「阿米（あま）」から来たことを、彼女は知っていた。故に、このように詠ったのである。「阿米」とは「天（あま）」である。「天（あま）」とは、神武が造船し、徴兵した東征の出発地、彦島である。
雷山に祀られている「皇」とは、九州天皇家の祖と同じ一族の王であった。

太宰府の持統天皇

水城に護られていたのは、太宰府も同じである。日本書紀に「筑紫に大堤を築きて水を貯えしむ」という記事がある。天智三年（664）の水城建造の記事である。だが、筑紫の水城建造はこの時が最初ではない。この時は改修というべきであろう。改修したのは日本國天皇家である。662年、白村において唐、新羅連合と日本國百済連合が激突した。この戦いは日本國、百済の完敗であった。百済王は高句麗に亡命し、百済の臣は日本國（関西）に亡命することになる。日本國天皇家は唐の侵略に備えて防衛システムを強化しなければならなかった。太宰府に水城を築いたのもその一環である。では、最初の太宰府の水城はいつ造られたのであろうか。

太宰府の傍にある観世音寺に水城に使用された木樋が保管されていた。この木樋は年代測定したデータでは西暦430年＋－30年といわれる。最新データで測定値を補正してみると、540年ごろになるという。
（以上「太宰府は日本の首都だった」内倉武久著）

水城に使用された木樋が540年ごろのものであるとすれば、太宰府建造はそれ以前である。まず、太宰府を造り、この京を防衛するために、御笠川をせき止めて水城を造ったと考えるべきであろう。太宰府建造は五世紀とすれば、この時代は倭の五王の時代である。

西暦	中国王朝	倭王	出　来　事
413年	東晋・義熙9	讃	東晋・安帝に貢物を献ずる。（『晋書』安帝紀、『太平御覧』）
421年	宋・永初2		宋に朝献し、武帝から除綬の詔をうける。安東将軍倭国王。（『宋書』倭国伝）
425年	宋・元嘉2		司馬の曹達を遣わし、宋の文帝に貢物を献ずる。（『宋書』倭国伝）
430年	宋・元嘉7		1月、宋に使いを遣わし、貢物を献ずる。（『宋書』文帝紀）

		珍	これより先（後の意味以下同）、倭王讃没し、弟珍立つ。この年、宋に朝献し、自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭国王」と称し正式の任命を求める。（『宋書』倭国伝）
438年	宋・元嘉15		4月、宋文帝、珍を安東将軍倭国王とする。（『宋書』文帝紀） 珍はまた、倭隋ら13人を平西・征虜・冠軍・輔国将軍にされんことを求め許される。（『宋書』倭国伝）
443年	宋・元嘉20	済	宋・文帝に朝献して、安東将軍倭国王とされる。（『宋書』倭国伝）
451年	宋・元嘉28		宋朝・文帝から「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事」を加号される。安東将軍はもとのまま。（『宋書』倭国伝） 7月、安東大将軍に進号する。（『宋書』文帝紀）また上った23人は宋朝から軍・郡に関する称号を与えられる。（『宋書』倭国伝）
460年	宋・大明4		12月、孝武帝へ遣使して貢物を献ずる。
462年	宋・大明6	興	3月、宋・孝武帝、済の世子の興を安東将軍倭国王とする。（『宋書』孝武帝紀、倭国伝）
477年	宋・昇明1		11月、遣使して貢物を献ずる。（『宋書』順帝紀）
478年	宋・昇明2	武	これより先、興没し、弟の武立つ。武は自ら「使持節都督倭・百済・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓七国諸軍事安東大将軍倭国王」と称する。（『宋書』倭国伝） 上表して、自ら開府儀同三司と称し、叙正を求める。順帝、武を「使持節都督倭・新羅・任那・加羅・秦韓・慕韓六国諸軍事安東大将軍倭王」とする。（『宋書』順帝紀、倭国伝）（「武」と明記したもので初めて）
479年	南斉・建元1		南斉の高帝、王朝樹立に伴い、倭王の武を鎮東大将軍（征東将軍）に進号。（『南斉書』倭国伝）
502年	梁・天監1		4月、梁の武帝、王朝樹立に伴い、倭王武を征東大将軍に進号する。（『梁書』武帝紀）

（ http://ja.wikipedia.org/wiki/）

太宰とは総理の意味である。南朝の東晋、宋の天子に対する太宰（総理）の意である。この京を造ったのは九州天皇家ではない。姫氏である。倭王「武」は九州の「倭國」と朝鮮半島の五カ国、併せて六カ國の都督に任命されていた。太宰府が都督府とも云われる所以である。太宰府の第一期の遺構は彼らのものであろう。

「倭の五王」として中国史書に記されている倭王とは、古代中国呉出身の王家一族である姫氏である。彼らは中国天子に臣従し、自らを太宰と位置づけていた。九州の「倭國」は中国天子のために征討した領土である。そして、我が一族は天子の領土を治める太宰であるという自己認識の下に、「京」を造営し、太宰府と名付けた。太宰府の初代の当主は古代九州の覇者、姫氏である。

ところが、527年、姫氏王朝の王「磐井」と日本國天皇家との間で戦いが起こり、磐井が敗れる。九州の姫氏王朝は力を失い、この「京」は奈良に都を構えていた日本國天皇家が支配することになった。太宰府の二代目の当主は日本國天皇である。日本國天皇家は太宰府長官を任命し派遣した。それが「筑紫太宰率」「太宰師」であった。

太宰府の三代目の当主が九州天皇家の天皇、天武である。622年白村江の戦いに日本國は敗れる。唐の百済鎮将は日本國天皇家に交渉団を派遣し、彼らは筑紫に駐屯した。日本國天皇、天智、日本國太政大臣、大友王は太宰府において外交交渉に当たっていたが、日本國天皇、天智は671年琵琶湖近江の都で没する。

その報を知り、すぐさま、唐と手を握った九州天皇家大海人皇子（天武）は東國（行橋市）で蜂起して、太宰府に残っていた日本國太政大臣大友王を倒す。勝利した大海人皇子（天武）は即位し、太宰府を手に入れた。天武は太宰府に入り、この京で日本全国を治めた。

人麿の雷山の歌は持統天皇が雷山に登った時の歌である。この時に、天武はすでに亡くなっていたと思われる。天武天皇が存命中に、持統が人麿と共に雷山に旅をすることはないであろう。天武が崩御し、持統が最高権力者となった。持統は、その後しばらく、太宰府に居た。奈良に帰るのは草壁皇子が亡くなった689年である。持統と人麿が雷山に登り、「皇」に参拝したのは、持統がまだ太宰府にいたときのことである。二人は太宰府を発ち、恐らく、海路を前原市に向かい、雷山に登った。

十三歳で九州天皇家大海人皇子の下に嫁いできた持統は夫、天武、わが子、草壁皇子の亡きあと、九州を去り、日本國の京（藤原京）に戻って即位した。持統は夫の國を去るに当たって、もう二度と訪れることがないであろう九州天皇家の遥かなる祖、「皇」に別れを告げに雷山頂まで遥々登ったのであろう。

皇は　神にし座せば　天雲の　雷の上に　廬らせるかも　(235)
皇は　神にし坐せば　真木の立つ　荒山中に　海を成すかも　(241)

持統は九州太宰府を去り、「遠の朝廷」の天皇となった。人麿は九州に残り、持統の代を懐かしむ多くの歌を歌った。そして、失意のうちに、九州天皇家の石見國（苅田町）の東海の畔で寂しく死んでいった。この雷山の歌は人麿が持統と行動を共にした最後の歌である。

万葉集第一巻、第二巻の編纂者は日本國天皇家を倒した九州天皇家の出身の歌人である。天武亡き後、持統は父の國、奈良に戻って、天皇となった。九州天皇家の人々は持統の奈良遷都に同行し、奈良に移った。ここに近畿天皇家が始まることとなる。だが、近畿天皇家の中心官僚は藤原氏であった。九州天皇家の皇子たちは、やがて、政治の中心から外れ、消えていく。万葉編者はこの現実を傷み、九州天皇家鎮魂の歌集を編纂した。

万葉集第三巻の編者はどうか。彼は持統と人麿が参拝した九州雷山の神が九州天皇家の遙かなる祖の一族であることを知らなかった。彼は持統が九州を去るに当たって、夫、九州天皇家天武の遙かなる祖に別れを告げに行ったことを知らなかった。彼には万葉第一巻、第二巻編者が抱いた哀しみはない。万葉第三巻は鎮魂なき歌集となった。